

ウラミスジシジミとその食樹に関する知見

広畑政己

ウラミスジシジミは、北海道、本州(東京、神奈川、千葉、埼玉、三重、和歌山の各県を除く)と大分、熊本の各県に分布するが、各々地域により依存する食樹も様々である。

またこの種は裏面の斑紋により *quercivora* と *signata* の2型が知られているが、一般的に知られている型名の *quercivora* とはギリシャ語の複合語で *Quercus* + *Vora* で“ナラ類を食べる”の意があり、名のごとくこれまでの記録では、どの地域でもブナ科のコナラ属に依存している。

因みに、各地域での筆者の知る範囲の食樹に関する記録をみると、北海道南部はミズナラ、カシワ、栃木県塩原地方に於ては、1967年と1974年の調査では主にコナラで、稀にカシワとクヌギ、その他にミズナラという記録がある。又、宇都宮市附近の低山地でもコナラから採卵されている。一方、長野県諏訪市、小県郡での記録をみると、標高950m ~ 1,200mではミズナラから発見されている場合が多く、安曇郡豊科町の標高700mではカシワから多く記録がある。又、木曾郡ではコナラ、ミズナラ、クヌギの順序で多く発見されている。中部、北海道の中間地点にある東北地区の岩手、山形の各県ではコナラから普通に採卵されている。北海道、東北、関東、中部の記録をみる限り、寒冷地と高山地ではミズナラ、カシワ。低山地ではコナラ、クヌギとなり、その食樹の分布の影響を受けているように思われる。

さて、兵庫県下に於けるウラミスジシジミの食樹については、六甲篠原、摩耶山麓の青谷、御影、有馬山の街、多井畑などでコナラとクヌギから採卵されたという記録がある。

筆者は、1976年10月30日と11月14日の2回にわたって、相生市矢野町の2ヶ所にて調査を行なった。その結果は次の通りである。

調査地は、ナラガシワとコナラが混生する林とクヌギコナラが混生する林で行なった。調査に当っては、同じ条件下にある木で、なおかつほぼ同じ数の木で実施した。

まず、ナラガシワ、コナラの混生林に於ては34卵が得られ、コナラにて7卵、ナラガシワにて27卵という結果であった。尚、一見寄生卵と判明するものは、34卵中9卵で寄生率26%となっている。

一方、クヌギ、コナラの混生林に於ては、102卵が得られ、コナラ69卵、クヌギ33卵となった。同じく寄生卵は102卵のうち34卵で寄生率33%となっている。

主として卵は休眠芽の基部付近に産付され、ひこばえから大木に至るまで得られたが、大木よりも小さな木の方が多く、又、樹冠より下枝に多く産卵されていた。又、コナラ、クヌギ、ナラガシワによって、一休眠芽当りの数に差が生じている。コナラの場合は1卵がほとんどで、2卵~4卵も稀に発見された。クヌギに於て

は、1卵 ~ 2卵が多く稀に3卵~4卵もある。ナラガシワでは2卵が多く、3卵~4卵も得られた。コナラ、ナラガシワ、クヌギにかかわらず、休眠芽の大きなものについては2卵以上となり、この産卵習性は安定している。

2ヶ所の調査から得られた卵の数からのみ判断すればナラガシワと次にコナラを好むという結果となったが調査に不十分な点も多く、この通りとは断言できない。ともかく、今回の調査ではナラガシワ、コナラ、クヌギのすべてから卵が見いだせたので前記の通り報告する。

この度の調査に当り、御協力頂いた、岩村巖、入江照夫、尾崎勇、高島千洋の各氏に末筆ながら感謝の言葉を申し述べる。

* 参考文献

- 藤岡知夫/日本産蝶類大図鑑(1975) 講談社
川崎昭人、若林守男/原色日本蝶類図鑑(1976) 保育社
白水隆、黒子浩/標準原色図鑑(蝶・蛾)(1966) 保育社
栃木県の蝶類集録委員会・昆虫愛好会/栃木県の蝶(1975)
函館昆虫同好会/北海道南部の蝶(1974)
信州昆虫学会/信濃の蝶 III(1976)
亀井文蔵、小野泰正/宮城県蝶類(1971)
山本広一、吉阪道雄/兵庫生物Vol.3 No.5 (1959)
兵庫県産蝶類目録(2)
北村四郎、岡本省吾/原色日本樹木図鑑(1959) 保育社
(S. 28: 姫路市)

昆虫館だより ③ 内海 功一

11月の野外平均気温は7.1°C、昨年より約3°Cも低い。このように本年は早く冬入りをした。寒さか加わる12月は虫に関してはさびしい感じの季節である。

館の中ではいま、オンパバタ、ツユムシクツワムシ、ササキリ、ウマオイ、エンマコオロギ、キボシカミキリ、トビナナフシ、キベリハムシなどが秋の虫を混えて生きのびている。つい先日までコバネイナゴがいた。スズムシ、オオナナフシは季節外れのもので大小さまざまのものがいる。寒くても安心なのはツチイナゴ、クビキリギスそして、キチヨウ、ルリタテハ、アカタテハのチョウ達だが、これらは反対に室温が上ると食慾がでて飼育には都合が悪いものだ。

昨年のトビナナフシは1月中頃まで生きたが、もうすぐ秋の虫も寿命を全うすることだろう。いま、約50種の虫達が、じっと、この季節に耐えている。(51. 12. 20)

(S.08: 佐用郡南光町船越)